

# 上野殿御返事

弘安三年七月二日 五九歳

去ぬる六月十五日のげざん<sup>見参</sup>悦び入って候。さてはかうぬし等が事、いまとでかへを  
かせ給ひて候事ありがたくをばへ候。たゞし、ないないは法華経を<sup>内内</sup>あだませ給ふにては  
候へども、うへにはたの事によせて事かづけ、にくまるゝかのゆへに、あつわらのもの  
に事をよせて、かしこ<sup>彼処此処</sup>ゝをもせかれ候こそ候めれ。さればとて上に事をよせてせかれ  
候はんに、御もち<sup>用</sup>候はずば、物をばへぬ人にならせ給ふべし。をかせ給ひてあしかり  
ぬべきやうにて候わば、しばらくかうぬし等をばこれへとをほせ候べし。めこ<sup>妻子</sup>などは  
それに候ともよも御たづねは候はじ。事のしづまるまでそれに<sup>置</sup>をかせ給ひて候わば、よ  
ろしく候ひなんとをばへ候。

よのなか上につけ下によせて、なげきこそを<sup>多</sup>く候へ。よにある人々をばよになき人  
々は<sup>雉鷹</sup>きじのたかを<sup>餓鬼</sup>みがきの<sup>びしゃもん</sup>毘沙門をたのしむがごとく候へども、たかはわしにつかまれ  
びしゃもんは<sup>修羅</sup>ずらにせめらる。そのやうに当時日本国のたのしき人々は、蒙古国の事を<sup>聞</sup>き  
ゝては、ひつじの<sup>羊</sup>虎の声を聞くがごとし。また筑紫へ<sup>赴</sup>おもむきていとをしきめをはなれ  
子<sup>見</sup>をみぬは、皮をはぎ、肉をやぶるがごとくにこそ候らめ。いわうや、かの国よりおし  
よせなば、蛇の口のかえる、は<sup>包</sup>う<sup>丁</sup>ち<sup>師</sup>やうしが<sup>姐</sup>ま<sup>鯉</sup>ない<sup>鮒</sup>たにをけるこ<sup>消</sup>あ<sup>むりょうこう</sup>ふ<sup>経</sup>なのごとくこそお  
もはれ候らめ。今生はさておきぬ。命<sup>消</sup>きえなば<sup>測</sup>一<sup>住</sup>百<sup>住</sup>三<sup>住</sup>十六<sup>住</sup>の地獄に墮ちて無<sup>測</sup>量<sup>住</sup>劫<sup>住</sup>ふべ  
し。我等は法華経をたのみまいらせて候へば、あさきふちに魚のすむが、天くもりて雨  
のふらんとするを、魚のよろこぶがごとし。

しばらくの苦こそ候とも、ついにはたの<sup>業</sup>しかるべし。国王の一人の太子のごとし、い  
かでか位につかざらんとおぼしめし候へ。恐々謹言。

弘安三年七月二日

日 蓮 花 押

上野殿御返事

人にしらせずして、ひそかにをほせ候べし。